

# 「農業」に魅力を感じて

にしひらよしまさ  
阿久根市長(鹿児島県) 西平良将



## 「東シナ海の宝のまち阿久根」で生きる

私は現在、鹿児島県阿久根市長として4期目の任期を拝命しています。市政の混乱から出馬を決意し、37歳で市長になったのはもう14年前のことです。それ以前の私の仕事といえば元々の家業である養鶏業です。私は大学進学とともに阿久根市を離れ、その後25歳で阿久根市に戻り養鶏業に従事することになりますが、この間、現在まで地元の二つの農業青年団体に所属しています。

一つは三笠農協青年部、もう一つは阿久根市農業青年クラブアグリズです。

ともに市内の若手農業関係者で構成されており、地元のさまざまなイベントを通じて社会活動に参加しています。

市長になるとさまざまな団体の役員などが割り当てられますが、この二つの団体は私が個人として自分の意思で所属している団体になります。

ここで本市について簡単に説明しますが、人口1万8000人ほどで東シナ海に面した約40kmに及ぶ海岸線を有しています。そして「東シナ海の宝のまち」を標榜し、黒潮に育まれる温暖な気候を利用した農業・水産業といった1次産業が基幹産業であります。高齢化率が40%を超えるこのまちにおいて、これらの団体に所属してい

る若手農業者は今後の本市のみならず、日本の農業を背負っていく「人材」の集まりであり、現に過疎化の進むこの地域を支えている中心的な組織の一つだと考えています。

## 二つの農業団体の主な活動内容

三笠農協青年部は、本市でも農業が盛んな三笠地区の農業関係者を中心に構成されており、会員数は23人で紅甘夏・大将季などの果樹農家、スナツブエンドウ・ソラマメなどの豆農家、減農薬大葉を育てる農業法人、地元の希少ブランド牛「華鶴和牛」を育てる畜産農家などのメンバーで構成されています。



あくね旬の朝市メンバー



交通安全の願いを込めて清掃

主な活動は、JA直営の販売店「Aコープ」にて毎月第3日曜日に開催される「あくね旬の朝市」での出品・販売です。地元の生産者が肥育したブランド牛「華鶴和牛」の値引き販売が目玉で、30年以上愛される「3年A組」ブランドの農業加工品を製造する県立鶴翔高校の生徒たちや地元水産加工会社と一緒に生產品の販売を行っています。中でも12月の感謝祭では、お歳暮などを目的に贈答用の大将季が人気で、外れくじなしの抽選会、青年部恒例の年末餅投げもあり多くのお客さまで賑わいます。そうしたお客さまの笑顔と接することができるのは何にも代えがたい感慨深いものがあります。その他にも年度末にはロードミラーの清掃や除草作業などのボランティア活動も行っています。年度初めの総会や忘年会では会員同士の懇親を深め、その中で出てくるさまざまな意見を参考にしながら農政分野の施策のヒン



子連れの参加者で賑わう産業祭の餅つき



第3日曜日は販売員として店頭に



アグリ忘年会

トとすることもありません。

次に農業青年クラブアグリスは、いわゆるかつての4Hクラブであり、地域は特にこだわらず本市内全域の農業関係者で組織されている会員数11人の団体です。

その主な活動としては、「阿久根みどり夏祭り」での踊り連参加や12月恒例の「阿久根市産業祭」への出店など本市のイベントに積極的に参加しています。特に「産業祭」では、コロナ禍で数年間控えた時期もありましたが、クラブ員で餅つきを行い来場者に振る舞うことで多くのお客さまに喜んでいただいています。また月に1回の定例会の後には

懇親会を開くこともあり、度々の懇親会を通じて会員同士の相互理解を深めています。

## 二つの農業青年団体に可能性を感じて

私は常に考えていることがあります。「農業」とは時として単に作物・家畜を育てるだけと思われがちですが、決してそんな平易な言葉で表現できる産業ではありません。「人の口に入るものを作る」ということは誰よりも安心・安全に意識がある人間でないとできないことでもあります。さらには、放っておけば荒れていくだけの土地をしっかりと管理し、世界に誇れる

日本の原風景を守るといった崇高な役割も果たしています。近年の世界情勢の不安定等に起因する物価の高騰などもあり、食品の価格高騰を伝えながら食卓の危機を過剰にあおるマスコミが多い風潮がありますが、私はこうした報道の姿勢についても違和感を覚えます。1次産業は人間の生活の根幹であり、何にも代えがたい産業だと思っていますし、もっと対価を払ってもいいと感じます。そんな報道を目にするたびに「あなたならその価格で食材を作りますか?」という問いを投げかけたいと感じています。

会員の仲間たちは、時には市長として、時には一会員として気兼ねなく対等に付き合える存在であり、彼らとの活動は私にとって心のよりどころにもなっています。自分自身をいまだに「青年」と思い込むことで(笑)楽しく過ごすことができ、また一方で自分の息子と同世代の会員との交流の中で気付けられることも多くあります。公務の都合上全ての活動に参加することはできませんが、でき得る限り一緒に活動したいと考えています。

これからも私自身二つの団体での活動を通じて、本市の1次産業、ひいては市政全般の発展につなげることができれば幸いだと感じています。そして市長として、この若い農業者たちの活躍をできる限り支援していきたいと考えています。